
翼のおれた天使

Chaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼のおれた天使

【Nコード】

N2348B

【作者名】

Chaki

【あらすじ】

心に深い傷を負っている16歳の『心こころ』だからも軽い女の子って思われがちで、それが原因である心に傷がつく出来ことが……。『愛』なんて信じれないと思っていたある日、合コンの帰りに襲われた。その時に助けてくれたのが”ショウ”だった。それがなにかもの始まりだった。。。

第1話 ココの生活

私は『愛』を信じられるのかなあ。

忘れるより想い続けたほうがっこいいってゆうのは

うそなの？

私も幸せになりたいよ。

――16歳の春――

「ココ??起きなさい!!」

今日もお母さんの声が私の耳に響く。

「ん……………」

今日も寝起きが悪い私。

昨日も合コンとかで寝るのが遅かった。

こんな生活はいけないとは思っけど、なんか心が満ちない感じを埋めるために

いつも遊んでた。

「ココ?? あんた今日から学校でしょ?」

ドアにもたれて、腕を組んでえらそうにしていかにも、お姉さまみたいなの

人は私の姉の『真紀ちゃん』

ちなみに、『ココ』とゆうのは私の名前が『心　こころ』ってゆうから。

私は、案外このあだ名は気に入っていた。

「いつてきまーす。」

と言い、玄関を出た。

「ココ!! おーはヨ!!」

友達のアキが待っていた。

アキとは、中学のときから一緒に仲が良かった。

それに、アキは私の気持ちを一番にわかってくれた。

「おはよ。アキ、昨日ケータイに電話した?」

「うん!! わかんないところがあつて・・・。」

「ごめん。その時、合コンに行ってたかも。」

アキは、少し顔がこわばった。

「やめなよー。ココは、可愛いからすぐに好きな人できるよ!!」

「そうかなあ。」

私はいつもそうやって、アキの言葉を聞いているふりをしてたんだ。
。。。

あの時、きいてれば後悔はしなかったかなあ。

第2話 ココのアキ

独りぼっちで・・・

淋しくて・・・

涙、流してばかりで。

そんな時、いつも私はずるいことを考えてた。

いつも、優しい人を頼ってきた・・・。

だから、もう私に優しくしないで。

「ココー！今日も一緒に帰ろう？？」

アキがいつものように笑顔で犬のように私に寄ってくる。

いつも、アキは可愛いと思う。いつも笑顔で誰からも頼られて、誰でも笑顔で話しかける元気のいい

女の子。私は、そこがすごく可愛いと思うけど時々そこが憎いときがある。

そんな私が大嫌いだった。

「ねえ、アキ。私、忘れ物あるからちよつと待ってて。」

「うん!!待ってるね!」

アキはまた、笑顔で私を送る。でも、そんなアキのことがすごく好きだった。

(あーあ。宿題のプリント忘れるなんて……。アキ待ってるのに……。)

アキが待っている場所まで走っていった。すると、アキが男子高校生にからまれている。

これは、初めてのことじゃない。アキは、他校からも人気があった。

「ちょっと、アキが嫌がつてんじゃない。やめてくれない?」

男子高校生は、がっかりそうに行ってしまった。

「ありがとう!!」

アキは、子犬かのように私に抱きついてくる。

このときは、少し安心する。

でも、私はもう男の前でもアキの前でも笑顔がでなくなってしまった。

でも、そのことはアキは痛いほど知っている。あれは、もう思い出したくない……。

すると、携帯から音楽が流れる。

「はい。心ですけど。」

「あー！ココ？？私、アイカんだけど今日も合コンいかない？？」

（今日もヒマだったし・・・いいか。）

「別に、いいけど。」

ただ単に、今日も親は仕事で朝まで帰ってこないし、これはいつものことだった。

「また、合コン？？」

アキは、私を心配そうに見ている。

（また来たよ。子犬ビーム。）

「うん。でも、大丈夫。今日は早めにかえってくるから、携帯に電話かメールしとくから。」

「わあーい！！ココからメールがくる！！」

アキは、手をあげてピョンピョンと飛び跳ねる。

（そんなに私のメールがうれしのかなあ。そりゃあ、ぜんぜんメールとかしないけど・・・。）

心はそんなことをおもいながら、家に帰った。

第2話 コロのアキ（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

第3話 合コン

ずっと、あなただけ信じてたのに

あなたは、私を裏切った。

あの時のせいで、私は心におおきな傷がついたんだよ？

悪いと思うなら私のところに戻ってきてよ……。

「ただいま。」

私が帰ってきてても、誰もいないのはわかっていた。

でも、つい声が出ちゃう。

（今日は、だいたい8時半には帰ってこようかな。）

そう思いながら、服を選ぶ。この時、いつも思うのは、私って生きてる意味あるのかなあ、だった。

だって、いつもこうゆう時には呼ばれて、あんな出来事があったのにまだ、大切にしてくれる人を探してる。

今思えば、男が絶えた時期がないかも……。でも、都合のいいと

きに呼び出してお金を貸してくれとかだった。

それか、2マタされてたり。なんで、私って男をちゃんと選べないんだろう。なんか、来るもの拒まずだったように思う。

それで、あんなことがあったのに……。

私は、高校生が着ないようなすごい色気のある服を着て、玄関のドアに鍵を閉める。

（私は、また男で幸せになって、また心に傷がつく。）

イケナイと思っけていても、体が勝手にうごく。まだ、16なのに……。

アイカが待っている場所に急いだ。

「アイカ。ごめん遅くなつて。」

すると、男の子4人組みがニヤニヤしながら、こっちを見てくる。

「ほら、そんな服着るから……。」

アイカは、ニコニコしている。

「ねえ、君なんてゆうの??」

一人の男が私に話し掛けてくる。

（私、この人苦手……。）

「心っていいいます。」

「へえ、可愛いね。みんなから言われない??なんか、可愛いとゆうより美人だね。」

「ああ、そうですか。ありがとうございます。」

と素っ気無い言葉をかえす。

相手がつまらないと思うかと思ったら、逆にしつこくなった。

また、たぶん男に慣れてる女って思ったんだとおもうけど……。

何回行っても、好きって思える人が見つからない。話が合う人もないし……。

いつも、それを楽しむアイカたちの気がしれない。

だって、知らない人と話して、もしかっこいいひとだったらベツト行き……。

そんなの『愛』じゃない。心から思える人が現れるまで私は探し続けるとおもうけど。

わたし、もう16だよ?家族の愛も知らないから、早く心から愛せるひとがほしいよ……。

すると、携帯の時計をみる。

もう、9時だった。

（やばい。8時半には帰るつもりだったのに・・・。）

「アイカ、ごめん。私、今日のかえるね。」

と上着を持ち、立ち上がろうとした。

「えゝ！もしかして、彼氏に呼び出された？？」

と一人の男が言うと、次々に言ってくる。

（もう、うるさいなあ。）

「ちがいます。」

と私は言った。

すると、少し酔ったアイカが余計なことを言った。

「えゝえゝ！！嘘だあ！！だって心、男絶えたことネイじゃん！！」

（アイカも余計なこと言うなよ！）

「もう、帰るから・・・。」

そそくさに私は、帰った。

でも、その時嫌な予感はしていた。でも、その予感があたるとは夢にも思ってたなかった。

第3話 合コン (後書き)

読んでいただきありがとうございます!!

第4話 恋の始まり

心は、ひとけのない公園を一人で帰っていった。

正直、恐かった。ここの公園は、もう行きたくない場所だったのに。

（あの記憶は、忘れたはずなのに……。）

だんだんと恐怖がくる。

でも、辺りを見渡すとだれもいないのを確かめると少し安心した。

心は、公園のベンチに座りアキにメールを打っていた。空を見渡すと、星がきれいで今日は満月だった。

（きれい……。）

心は、携帯の画面に視線を戻した。

その時、いきなり後ろから抱きつかれた。

「……」

心は、必死になって抵抗した。でも、案の定、男の人の力は強かった。

（これじゃあ、あの時と一緒に……！）

心は、目に涙を浮かべた。

また、あのときの恐怖がよみがえった。心は、一心不乱にあばれた。

「い・・・や助けて！」

（怖いよお。）

すると、心は男に押し倒された。

「！！」

今日の合コンのあの男の人だった。ずっと、思いださないように心に閉まっていたのにどんどんその思

い出が心からあふれる。

あの時もそうだった。私のこと見離さないと思っていたのに・・・信じていたのに。

あの人は私だけ置いて逃げてった。あの思い出は、どんなに楽しいときだって思い出すほど

鮮明に覚えている。

すると、男の人は私の首筋にすべらせる。

（気持ち悪い・・・。）

すると、フワッと体が軽くなった。

私は、あの時のことは目を閉じていてぜんぜんわかんなかったけど「シヨウ」が私を助けてくれたのは

わかったよ。

あの時から、私の恋が始まっていた。

第4話 恋の始まり（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

第5話 ショウくん

私の恋は、どんなに幸せな恋でも

最後には壊れるガラスの恋みたいなものでした・・・。

心は、体を丸めてガタガタと震えていた。

上着を頭にすっぽりかぶせて目を閉じたままだった。

あれからどうなったかはわからない。

「おねえさん、大丈夫？」

私は、ゆっくり顔を上げた。そこには男の姿はなく、中学生ぐらいの男のこが笑顔で私を立ち上げらせてくれた。

「君が助けてくれたの？」

私は、半信半疑で訊いてみた。

「うん！おねえさんが嫌がってたから助けた！」

その子は、笑顔で私を安心させてくれた。

その子は、中学生ぐらいの身長で髪は黒髪でやや長め。なんか、純情そうな男の子だった。

「あ、ありがとうね。」

私は立ち上がったけど足がまだ、ガクガクと震えていた。

「おねえさん。ここ座ろう!！」

とその子は、私の状態をみて気づいたのかベンチに座らしてくれた。

「君は、名前なんてゆうの?」

「僕?僕は、シヨウってゆうんだあ。ちなみに中3なんだ!」

(へえ、ぜんぜんそうには、みえない。)

「おねえさんは?」

と私に無邪気に笑ってくる。なんか、その笑顔を見るとさっきあったことが嘘のように心が落ち着く。

「私は、こころってゆうんだあ。君の1つ年上かなあ?」

すると、シヨウが驚いた顔をして身を乗り出す。

「おねえさん、16??みえないね!！」

「ありがとう!」

すると、シヨウの携帯がなった。

「はい！！シヨウです！！」

シヨウは、どんな時も笑顔を絶やさないいい子だと思ってたのに・・。

あの時、私の心はシヨウでいっぱいだったから、そうゆうところには、ぜんぜん目がいつてなかった。

「ごめんなさい！！心おねえちゃん！！僕帰るね！！」

「うん・・・。今日は、ありがとう！」

と少しさみしい顔をする心。

それをみかねた、シヨウは心に歩み寄り自分のつけていたマフラーを心の首に巻いた。

「心おねえちゃん！！また、あえるよ。」

あの時の気持ちは、今でも忘れない。

心がぎゅゅつと締め付けられてるような・・・。

すごく苦しくて。

こんなに、男の子を想うことはなかった。

第5話 ショウくん（後書き）

よんでいただきありがとうございます！！

第6話 新たな彼氏

私、また笑えるかな。

好きな人もできるかな。

私もふつつの女の子がよかったなあ。

ピピピ　　ピピピ

心の目覚まし時計が鳴る。

「・・・・。」

昨日は、寝られなかった。なんか、落ち着かなくて・・・。

ショウくんのあの幸せそうな笑顔、いいなあと思った。

でも、私はもう笑えないから。

今日は、土曜日で学校も休日だった。

アキと遊ぼうと思ったが、アキはあいにく家族と旅行中。

私の姉は、母のあまりにも無責任で自分勝手と理由で彼氏の家に3ヶ月も前から居候しているらしい。

私はおねえちゃんしか、頼れる人がいなかったし、お父さんもなかなか帰ってこない。

だから、家族がみんな集まる事はなかった。

それが、小さい頃から絶えられなかった。そんな過去にひとりながら、私はベットにもたれかかった。

〃ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。〃

携帯が鳴る。

「はい、心ですけど・・・。」

いつものように無愛想な私。

「あー！やっと、つながったー！！」

その声は、まぎれもなく前の彼氏の声だった。

「もしかして・・・夏野くん？」

「うん。」

夏野くんは、私の初めての彼氏だった人。

たぶん、まだ好きになる気持ちがあった頃だった。

「おれさ、ココと別れた事・・・後悔してんだよ。だから、また・・・おれとヨリを戻さないか？」

といきなりの告白だった。

別にこれといって彼氏もいなかったし、じつは私も夏野くんと別れたのは相当嫌だった。

「・・・うん。ヨロシク。」

とひとこと言った。

そう言つと電話から聞こえる夏野くんのうれしそうな声が聞こえた。

「じゃあ、また今度連絡するからな!!」

と嬉しそうに電話をきつた夏野くん。

それが、私を変えてくれるかもしれない。

そんな気がした。

私は、8時半になると家をでた。

また、合コンではない。ショウくんのマフラーを返そうと思ったからだった。

私は、恐いけどあの公園の門の前で待ってた。

すると、人影が・・・！！

あの少し大人びた姿で、でもなんか子供っぽい・・・そう。あのしぐさは間違いなくシヨウくんだった。

「シヨウくん。」

「ああー！！心おねえちゃん！！」

（やっぱり、なんか子供っぽい。）

「どうしたの？？こんなところにいると危ないよ！！」

と心配するシヨウくんも可愛かった。

「はい。これマフラー。ありがとうね。」

ときれいにたたんで、手渡した。

「こんなの、もらい物だったからいいのに・・・。」

「ダメだよ。」

「いいのー！！あー！そうだあー、心おねえちゃんにこれからも逢いたいー！！」

とすぐるシヨウくん。

「いいよ。じゃあ、ヒマだったら8時半くらいにくるね。」

「うん!」

と本当に嬉しそう。

私は、ショウくんと少ししゃべることにした。

でも、私はここまで人に話さなかったこともショウくんには話せた。

あれは、なんだろう・・・。

第7話 ココの過去

私は、シヨウくんにすがってお願いされたので少しだけ話すことにした。

「わあ、また心おねえちゃんと話せるなんてうれしいな〜！」

とうれしそうなシヨウくん。

「あのお、シヨウくんは彼女とかいないの？」

と素朴な疑問をシヨウくんに言った。

「うーん・・・付き合った人は何人もいたけど、僕から好きになった人はいないなあ。」

と案外、意外な答えが返ってきた。

「へえ、シヨウくんってなんか純情そうにみえたんだけど・・・。

」

「えー！！僕は、あまりそうゆうようなこと言われたの初めて！！」

とシヨウくんは、やけに驚いている。

「じゃあ、心おねえちゃんはどうなの？」

とあまり訊いてほしくない質問だった。

「私ね・・・すっごく好きだったひとがいたの。でもね・・・その男の子は小さかった頃の話だから

覚えてないんだけど・・・誘拐されて戻ってこなかった。誰も何を訊いても教えてくれなかったんだ。

あの時の男の子のことを私は憎んだんだ。だって私と幸せになろうって言うてくれたんだもん。

なのに、連絡1つくれないんだもん。」

と心の目に涙があふれた。

「心おねえちゃん・・・。」

「それから好きな人ができなくなった。忘れようとしても思い出さなんだもん。それから、私ね・・・

ずっと合コンとか、彼氏作ったり・・・だから、だよね？」

「何が？」

とショウくんは、やさしく訊く。

「私・・・襲われそうになったんだ。」

下を向いてた心がショウくんの方をみた。

「そのときは、独りだったの？」

「うっん。独りだったほうがまだマシだった。そのとき、やっと大好きになれた先輩が一緒だった。」

でも、そのとき先輩は私のことおいて逃げたんだよ？もう、男なんて信じないって思おうとしてたのに

まだ、私を大切にしてくれる人探してんだよ？？バカだよね・・・。

「

心の目からは、何粒も涙が流れてた。

すると、シヨウくんは私の頭をなでた。

（これじゃあ、かつこ悪い・・・。）

「心おねえちゃんは、がんばったよ。」

シヨウくんの私を見る目は大人で、なんか懐かしい目だった。

あれから何時間、シヨウくんになぐさめてもらってただろう。

私に優しくすると、いつもその人に頼っちゃう。

だから、私に優しくしないでよ・・・。

私は、それからシヨウくんには会わなかった。

第8話 デート

お久しぶりにあの頃の夢をみた。

私と大好きだった男の子の夢・・・。

男の子は、私と遊んでくれてるけど私のことを見てくれない。

「ココー!!」

アキが私の家に遊びにきた。

「あ、アキ。」

アキは、心にお土産を持ってきたらしい。

2人は、心の部屋に入り話した。

「ええー！！！！ココにまた彼氏が出来た???」

と大声を出すアキ。

「うん。初めてつきあった夏野くん。」

「ココ?また傷つかないよね・・・。」

とアキは、心配そうに心の顔をみた。

（なんだ・・・アキも私のこと心配してるんだあ）

「じゃあ、私きようは帰るねー!」

「うん。ばいばい。」

と別れる2人。

でも、心には夏野と会う約束をしていた。

2人で会うのは、もう2年前になる。あの時は、まだ笑ってたのに。

夏野くんとは、公園で会うことにした。その公園は、初めてデートした場所。

心は、髪をワックスをつけてクセをつくった。心の髪は、肩までのびた試がない。

それは、心は彼氏と別れるたびに髪を切っていたからだった。

心は、支度をして家をでた。

公園は、案外カップルが多かった。

待ち合わせの場所に行くと、もう夏野がいた。

「あー!!!」

と手を振って笑ってる。

「お久しぶり。夏野くん元気だった？」

「うん。ココは?。」

「私も・・・かな。」

（私のうそつき・・・。）

私は、人に嘘つくのが嫌だった。

「ねえ、ココはどこ行きたい?。」

といきなり手をにぎってきた。

（え、いきなり手ってつなぐか?）

と心は、不安になりながらだまってついていった。

「うーん・・・夏野くんの行きたいところでいいよ。」

と心が言つと、夏野くんはいろんなところに連れていった。

―夜―

「ねえ、ココ？」

と夏野くんがいきなり言った。

ここは、だれもない夜景のきれいなビルの中。

人にもぎやかだった。

「ん？」

すると、夏野くんは心に近づいてきた。

(もしかして・・・夏野くん私にキスしようとしてる?)

夏野くんは、私の肩をぎゅうつつつかんだ。

すると、キスしようとした。

「!?!?!」

第9話 別れと新たな恋

夏野くんはキスしようとしてきた。

でも、私にとってはファースト・キスだ。

私は、あれだけ男と付き合ってきたのにHはおろか、キスもしたことがなかった。

だって、男達は全員私じゃなくてお金が目当てのひとが多かったから。それは、自分でもわかってた。

高校生なのに10万とかお財布に入ってる女の子は珍しかったから・
。。。

でも、夏野くんはちがった。私だけを見てくれた。夏野くんとは、ただのすれ違いで別れただけだった。

だから、今も私のことが好きならファースト・キスぐらいあげようとおもったけど・。。。

なんか違う。なんか、あげたい人が違う気がする・。。。

でも、なんでそのとき思いついたのが・。。『シヨウくん』だったんだろう。

心は、キス寸前で夏野くんをこばんだ。

「・・・やつ。」

私は、顔をそらした。

「・・・・・・・・ごめん。」

夏野くんは私が思ってたよりやさしかった。

「私・・・今そうゆう気分じゃないから。」

と心は立ち上がり、夏野くんにこう言った。

「ごめん・・・。夏野くんとは付き合えない。」

心は、去ろうと思った瞬間。夏野くんから衝撃的な言葉がかえってきた。

「べつに・・・本気で好きだったわけじゃないし。ただ、ヒマだったから。」

と夏野くんは笑いながら心を見た。

「・・・・・・・・。」

心は、ショックだった。夏野くんはみんなとは、違うと思ってた。

心は、目に涙をためながらその場を離れた。

なぜか、たどり着いたのはあの公園。

もう、11時半。ショウくんが来るはずがないのに・・・。

心は、ブランコに乗った。少し、ブランコをこいだ。

私の一番嫌いなところ・・・すぐ傷ついたら、やさしい人に頼ること。

いつもそうやって同じこと繰り返してきたのに。

「・・・もう、いやになっちゃうよ。ショウくん・・・逢いたい。」

来るはずがないのに私は、それを期待してる。

すると、向こうから声がする。どんどん近づいてくる。

「あれ??心おねえちゃん??」

それは、今帰ってきたショウくんだった。

「ショウ・・・くん?」

「どうしたの??また、なんかあったの??」

ショウくんは私が泣いてるのをみてすぐにそばによった。

(温かい・・・。)

そう思った。

「ショウくん・・・」

心は、シヨウくんを強く抱きしめた。

「……………」

私かっこ悪い。シヨウくんだってあきれてるよ。

でも、シヨウくんはちがった。

「今から……僕の家くる？」

それは、子供っぽいいつものシヨウくんではなく15歳という一人の男としてだった。

第10話 ショウの大切さ

「今から・・・僕の家来る？」

と真剣なまなざしで心を見てきた。

「・・・・。」

心は、声が出る力もなく、うなずくだけで精一杯だった。

ショウくんは、心の手をやさしくにぎった。

ショウくんは、いつもとはなぜは違う不陰気がでてるような・・・。

少し歩くと、でっかくてきれいなマンションがそびえたっている。

「ここなの？」

やっとのことで出た言葉が「ここなの？」だった。もっとほかに言うことはなかったのかと今も思う。

「うん！！僕、一人暮らしだから！！」

といつもどつりのショウくんに戻った。

（良かった。ふつつのショウくんにもどったんだ。）

ショウくんの家にあがると、なんともいえない大人っぽい部屋だっ

た。

ほんのり明るい電灯がそう言ってるようにみえるからだった。

「きれいな部屋だね。」

と心は、ソファーに座りながら言った。

「そう??? ありがとう!! 僕、ちよつと着替えてくるね!」

と言い、奥の部屋へ行ってしまった。

(ショウクんの部屋、私より広いなあ。)

部屋は、物音一つしない。

心は、体育すわりをしながらクッションを抱いていた。

すると、奥の部屋からショウくんが出てきた。

「ごめん。遅くて!!」

ショウくんはパジャマかはわからないけど、私服で出てきた。

「ううん。」

心は、首を振る。

「それで、どうしたの??? 心おねえちゃんは。」

シヨウくんは、心の隣にすわった。

（どうしたの???って今日のことだよね・・・。）

「私に前の彼氏がもう一回付き合おう???って告られて、私いいやつて思つてOKしちゃったんだよね。バカだよね。」

この時、ぜったいシヨウくんは私のこと励ましてくれるというやさしさに甘えていたんだ。

だから、あの時もそれを期待してたんだ。自分では、認めたくないけど。

私がシヨウくんの言葉で傷つくなんて思つてなかったから・・・。

「うん!!心おねえちゃん、同じこと繰り返して傷ついて!!」

と笑顔で言つた。

（なんか・・・むかつく。）

ただ、シヨウくんに本当のことを言われてなぜかはわからないけどすごくむかついた。

ここにいると、シヨウくんにあたっちゃいそうだしなんか、自分のダメなところを言われてすごく恥ずかしかった。

心はかばんとコートを持ち、玄関に向かう。

「どうしたの???なんで帰るの???心おねえちゃん??」

シヨウくんは、心の腕をつかむ。

「来るなあ！！」

とかばんをなげると、壁にかかっていた絵の角でシヨウくんの目のギリギリのところで切れた。

（ほら。シヨウくんにあたっちゃった。シヨウくんを傷つけた。）

心は、振り返りシヨウくんを泣きそうな目で見た。

「悪かったね……。しょうがないじゃん！！あれだけ傷ついてもまだ探してるんだからね。そのせいで、失ったものだって

あるんだもん！！私、ここ2年間どうやっても笑えないの！！私だって、ふつうの恋がしたいよ。」

心は、座り込んだ。

シヨウくんは、私のそばに寄る。

「やったー！！心おねえちゃん、やっと本音はけたね！！少し楽になった？？」

いつもの笑顔だった。

（もしかして……。私のために？）

シヨウくんは、私のために体をはって私を励ましてくれた。

この日、なぜかはわからないけどいつか笑えるような気がした。

シヨウくんといると、幸せになれるような気がした。

第10話 ショウの大切さ（後書き）

読んでいただきありがとうございます！！

第11話 ショウくんの実

心は、涙があふれる。

「心おねえちゃん！僕、眠いからベッドにいるけど心おねえちゃんも眠たかったらおいでねえ！」

と笑顔でいった。

私は、いく訳がないと思った。今日は、男で傷ついたっていうのに・

でも、私の心と体は違ったみたいだ。

どんどんショウくんの部屋へと進んでいく。

ドアを開けた瞬間、ショウは一瞬おどろいた顔をしたがまた優しい笑顔に戻った。

「心おねえちゃん！どうぞ！」

とベッドのはじにショウくんはつめた。

心は、さっきよりも子供っぽい泣き方でショウくんにしがみついた。

「ショウ・・・くん。」

ショウくんは、私をなでてあげた。

それは、なんかにつつまれているみたいな感じがした。

ショウくんは、私に布団をかぶせてくれた。

「明日から、学校でしょ？心おねえちゃんは風邪ひいちゃだめだよ！」

と優しい心遣いだった。

「ねえ、少しお話しよー！」

とショウくんは、右手をあげて言う。

「いいよ。」

「ねえ、心おねえちゃんは……。」

と言うと心は、人差し指をショウくんの口にあてる。

「心おねえちゃんじゃなくて、心でいいよ。」

こうゆう時、普通は笑顔で言うのが理想だと思っただけどやっぱり私の顔は冷めてるのがわかる。

「わかった！心ちゃんにするー！」

と布団にくるまりながら、無邪気に笑うショウくん。

（いいなあ。あんなにうれしそうに笑えて。）

と少しうらやましそうにみていると、シヨウくんが気づいた。

「ねえ、心ちゃんは一人暮らしなの??」

とシヨウくと心は向かい合わせになって言う。

「ううん。私、家族と暮らしてるよ。でも、崩壊ぎみかも……。」

シヨウくんの顔がくもる。

「なんで……?」

「お母さんはね自分勝手にどこかに遊びにいったって帰ってこないし、お父さんはそんなお母さんに嫌気がさして出ていった。」

「おねえちゃんもそれが嫌で彼氏のところから帰ってこないから力ず。」

心は、シヨウくんの顔を見ると暗い顔をしている。

「どうしたの?」

心が訊く。

「だって……そんなの家族じゃないよ。」

「そうだね。」

少し、沈黙があった。

「じゃあ、シヨウくんはなんで一人暮らしなの？」

先に沈黙を破ったのが心だった。

「僕のお母さんは、違う人のお母さんだから……。」

心はすべてを察した。

「浮気した時の子供なの？」

シヨウくんはうなずいた。

「お父さんは……？」

「とつくに死んでるよ。」

とシヨウくんは悲しい笑顔だった。

「大変……だったね。」

心は、シヨウくんを見る。

シヨウくんは、布団を頭までかぶった。

「もう……寝よう。」

シヨウくんの体は、ガタガタと震えていた。

心は、優しく布団のうえから抱きしめた。

このときからだった・・・。
私の恋が始まっていたのは。

第12話 アキの笑顔

朝からにぎやかな音楽が流れている。

「・・・んん。」

心が先に起きた。

シヨウくんの携帯からだった。

右のほうを見るとシヨウくんが気持ちよさそうに寝ている。

心は起こさないように、静かにシヨウくんの部屋から出た。

「コゝコ！ー！おはー！ー」

と学校に着くとアキが抱きついてきた。

「おはよ。」

いつもの私。

「ねえ、今日こそ一緒に帰ろうね！ー」

「わかったって。」

アキに悪いとは思ってたんだけど、なぜかいつも用事を思い出して一緒に帰れない。

「ねえ、アキ。あんなんで今日は一段と子犬ビームでてんの？」

とアキがおかしいことに気がついた。

「え???そう???じつは・・・彼氏ができました!!」

「……………」

言葉が出ない。

「本当?どうゆう人？」

「じゃあ、今日みせてあげるよ!!」

とうれしそう。

私もアキが幸せならいいと思ったし、アキが選ぶんだから普通の男の子だと思ってた。

でも、あんな男とは思わなかった…………。

―帰り道―

「ココは、好きな人見つかった??」

「……………ううん。」

と下を向いたまま。

「私…………ココにはもう傷ついてほしくないんだ。」

とアキはいつもとは、ちょっとちがう。

「・・・なんで？」

いつも気になっていた。アキは、こんな私のどこが好きで友達になったんだろうっておもってた。

「だって、ココは私の初めての友達だもん。」

「・・・・・・？」

私は、少し驚いた。

アキは、たくさん友達がいるとばかり思ってた。

「初めて・・・？」

私は、訊いてみた。

「うん・・・。小学校のとき友達いなかったから・・・。みんな私のこと裏切るから。」

アキが初めて見せた悲しい笑顔。

私は、なにも言わずにアキの手をにぎった。

「・・・私は、一生アキの友達だから・・・。」

その一言だけなのにアキは、たくさん涙を流して。

私は、アキをこれからももっと相手してやろうと思った。

「そんなんじゃ、彼氏びつくりするよ。」

アキは、笑顔でうなずいた。

町の喫茶店で待ち合わせらしい。

「まだかな?? 私ねえ、もうめちゃくちゃLOVEなんだあ!!」

とノロケを聞く心。

「はやく来るといいね。」

「うん!!」

アキ?

あこのろのアキは私のあこがれでもあったんだよ?

なのに・・・どうして?

第13話

3人で

心とアキは、あれこれ1時間も待つ。

「遅いなあ。。。」

とアキは待ちきれないのか携帯を出し、彼氏にかけるとはわかってないけど携帯にかけた。

「あつ・・・もう、私1時間もいるんだけど!!」

と怒ってる。でも、アキの怒り方はなんとなく可愛げがある。

「うん・・・え??もういい!!」

となんか、訳もわからないまま携帯をきった。

「えっ?どうしたの?」

「なんか、用事ができてこれないんだって!!」

アキは、テーブルにあるコーヒーをのみほした。

「もう、行こう!!」

とアキは心の手をつかみ、喫茶店を後にした。

2人は、心の家に行くことになった。

「おじゃまします。」

とアキはが入ると、だれもいない。

「今日もみんないないから……。」

と心は、かばんをソファーにおいた。

「そうなんだ……。でも……。あの」は？」

と指をさす先には、なんかベツトで寝ている。

「……?？」

心は、布団をゆっくりとつてみると……。

「んん……。あー!心ちゃん!」

とシヨウくんが心に抱きつく。

「え!シヨウくん??」

心はすごく驚いた。

「誰??心、同棲してたの??」

「うつん、シヨウくんが勝手にはいったんでしょ?」

と心は、シヨウくんのほうを見る。

「ごめん。。。だって、心ちゃんきのう僕が寝てる間にかえつちやうんだもん。」

今日は、一緒登校したかったもん!!」

といつもどりのシヨウくん。

「とかなんとか言っちゃって!!彼氏とか??」

とアキがあやしいと言ってるような目つきだった。

「だからちがうって。。。」

あれから、3人でいろいろはなした。

すごい楽しかった。私の恥ずかしい話をしたりアキはたのしんでいたようだった。

「じゃあ、ばいちゃー!!」

アキは、時間になったので帰ることにした。

「ごめんね、あんなにうるさい人で。」

「ううん。いろいろ楽しかったよ!!」

「。。。。。」

でも、会話が續かない。

（なんか、話さないと。）

すると、シヨウくんは私をまじめな目で見てきた。

「心ちゃん……。」

それは、大人のシヨウくんだった。

第14話 告白

「心ちゃん……。」

気づくと私は、ソファーに押し倒されていた。

「……なに？」

「……。」

シヨウくんは、黙る。

（やばいよ……。これは、本気だ。）

心は、確信した。

「ねえ、シヨウくん？」

心は、声をかけてみる。

すると、シヨウくは私の上からどいた。

シヨウくんは後ろを向きながら、あぐらをかいだ。

「……ごめん。」

「え？」

心は、チラッとしか見てないけどシヨウくんの顔が赤くなっていた。

「シヨウくん・・・。」

心は、シヨウくんの顔をみようと覗き込んだがますます赤くなって、

「みるなあー!!」

シヨウくんは、手で顔をおさえた。

「どうしたの?」

「・・・。」

シヨウくんは、何も言わない。

「・・・だって、かつこ悪いじゃん。」

「どこが?」

心はさっぱりわからない。

「だから!!好きな子に大好きって言えないことが!!」

シヨウくんは、また真っ赤になった。

「・・・まじかつこ悪い。」

「・・・え?」

心は、なんかホットするような感じがした。

シヨウくんは、どこもかっこ悪くない。

かっこ悪いのは私だよ……。

いつまで好きって自分から言えないの？

シヨウくんは、年下なのに私よりも大人っぽい。

すきだよ……。一つ一つのしぐさがすきだよ。

心は、シヨウくんのまえに座りなおした。

「？」

シヨウくんは、驚いてる。

「ぜんぜんかっこ悪くないよー！私も返事言わなきゃね。」

「返事？」

「うん。ちゃんと言っよ。」

「……………」

シヨウくん……………」めん。

第15話　だいすきだよ

「シヨウくん・・・言うよ?」

心は真剣なまなざしでシヨウくんをみた。

「・・・うん。」

心は、シヨウくんの手を優しく握った。

「!?!?!」

シヨウくんは、すごく顔が赤くなった。

「私も・・・。」

「え・・・?」

「シヨウ・・・大好きだよ。」

心は、優しく微笑んだ。

「やったー!?!?!」

シヨウは、私に抱きついた。よっぽど嬉しかったみたいだった。

「ちよっ!シヨウくん?」

「心ちゃんが笑った〜!?!」

(え．．．？)

心は、かばんの中から手鏡を出して顔を見た。

(本当だ．．．。)

「本当だ！！シヨウくん．．．ありがとう。。。。」

心はまたどんと涙が出てくる。

「おれ．．．心ちゃんのこと．．．大切にする！！！」

シヨウくんの腕は温かくて、安らぐ私の憩いの場所だった。

だって、これほどにないくらい優しく抱きしめるんだもん。

初めて体験する気持ちがシヨウウといて、たくさんあった。

これからもいろいろな幸せを私にちょうだいね。

―夜―

「心ちゃん．．．。なんかしゃべろうよ。」

あれから、緊張してかわからないけど言葉が見つからない。

「え???・・・うん。」

(困ったなあ。。。なんにも会話が思いつかない。)

「そうだ!!」

シヨウは、いきなり立ち上がった。

「なに??」

「いまから付き合ってくれる??」

「うん。」

(どこ行くんだろう。。。)

シヨウは、バイクを出してきた。

「乗って!!」

「え????シヨウくん、まだ15才だよね?」

「うん。でも、免許はいちおは・・・あるけど。」

心は、不安だったがシヨウにつかまった。

このまま、どこかに行きたいね。。。シヨウ

第16話 初めての思い出

「シヨウくん????どこ行くの?」

心は、怖いのかわからないがシヨウにしがみついている。

「心ちゃん!!い、痛いからもう少しだけ力ゆるくして!!」

「あ、ごめん!!」

心は、力をゆるくした。

「今から行くところは、俺の秘密のところ!!」

「ええ???教えてよ!!」

心は、また笑顔になる。

(また笑えた。 大丈夫だよね!シヨウくんといたら・・・。)

カーブを曲がると、うみが見えた。

「わあ!!海だ!!」

バイクは、そこで止まった。

「え???ここ??」

シヨウは、笑顔でうなづいた。

海は驚くほど澄んでいて、月光が海面を照らしている。

2人は並んで歩いた。

「ここ・・・前見たことあるかも・・・。」

心は、口をひらく。

「本当？」

「うーん・・・でも、わからないや。。。」

2人は、また黙ってしまった。

「あー!!あつた!!」

シヨウが指さす方向には岩がある。

「ここに座ろう?。」

「うん。」

心は、シヨウの隣に座った。

「ねえ、私のどこがいいの?」

心はいきなり質問をした。

「え??・・・うーん・・・。」

（もしかして・・・ないとか？）

心は、がっかりした。

「あ！違うよー！ないってわけじゃないよー！」

「じゃあ、どこ？？」

心は、興味津々にきいた。

「・・・・・・・・。」

なんか、言ったようには聞こえるが何を言ったのかわからない。

「??？」

心が首をかしげる。

「全部・・・・・・・・。」

（え？　　）

シヨウを見ると顔が赤くなってるのがわかる。

「照れてる・・・・・・・・。」

心がつぶやくと、シヨウが心を見る。

「なに？」

「心ちゃん・・・大好き。」

心も顔が赤くなる。

「もう、何言ってるの!!」

でも、心はすごく嬉しかった。

「あ!! さっきの質問。具体的にいわなきゃだめ!!」

「・・・・・・・・わかったよ。」

シヨウは、せきばらいをして上をみた。

「まず・・・心ちゃんの一つ一つが好き。明るいところが好き。」

僕のことちゃんと認めてくれるところも。なんか、心ちゃんといると温かいんだよね。」

「そんなに・・・・・・・・?」

「ううん。まだもう一つ。僕の夢・・・一緒にかなえてくれそう。」

あの時のシヨウの夜空を見上げた横顔が夢にあふれていてすごく愛おしく感じた。

心は、頭をシヨウの肩にのせる。

「・・・・・・・・心・・・・・・・・ちゃん??」

(んふ・・・また照れてる。。。)

「心ちゃんじゃなくていいよ。。。彼女なんだから。」

心は、微笑む。

「じゃあ、なんて呼べばいいの？」

「ココってみんなから呼ばれてるから・・・ココって呼んでほしい。」

心は、シヨウの顔を見上げた。

シヨウは、心を見つめる。

「ココ・・・。」

初めて『ココ』って呼んでくれた。

すごく温かくて、くすぐりたい。。。

ずっと一緒にいようね・・・シヨウ。。。

第17話 春

―春―

私は、まだみんなの前では笑ったことはないけどいつかと思って
る。

あの海に行つて以来、シヨウとは会えなかった。

シヨウは受験生だったから・・・。

だから、少しさみしいのかも思つてたり。

「ココ～！！早く～！！入学式始まるよ！！」

アキもなんかわからないけどはしゃいでる。

「なんでそんなに喜んでるの？」

「だって～かわいい男の子が来ると思うとね！！」

（また、あきれる・・・。）

「どうしたの？彼氏は・・・。」

とあきれた感じで言った。

すると、アキは少し悲しそうに言う。

「あの時、私別れたの。」

（え？別れた？？）

「え？だってラブラブじゃなかったの？」

「浮気・・・されてて。」

（はあ？？？）

「じゃあ、あの人はアキの王子様じゃなかったんだよ。でも、アキには王子様ちゃんと

いるよ。だから、来るまで私がアキのこと守ってあげる。。。」

（自分で言うのも恥ずかしい・・・。）

「コッソリ！！」

アキは、私に抱きついてきた。

本当にアキは私の大切な友達だから、ほっとけないんだよね。

2人は、体育館に行った。

そこには、たくさんの1年生と偉い先生がたくさんいた。

生意気そうな子や落ち着きのある可愛い子とか。

「あゝあ。。。めんどい。」

心はあくびをする。

「もう〜ココ！私の王子様探してよ。」

「はいはい。」

（本当に世話のかかる子だ。）

（う〜ん・・・あの子はなんとなくカッコイイけど、チャラチャラすぎ。）

でも、隣の子は頭良すぎて逆につりあわない。あー！あの子いいじゃん。

でも、彼女持ちって感じ・・・。

心は、自分なりに自己分析を始めた。

すると、校長先生が前に立ちなんか言ってたけどぜんぜん聞いてなかった。

シヨウのこと思い出すと、もう止まらない。

（シヨウ・・・ちゃんと高校決まったかな？心配だなあ。

とゆうか、彼女には普通高校ぐらい教えろよ！！もう！！しかもメールぐらい送っても

いいじゃん。）

と考えがどんどん浮かんでくる。

「えー1年代表、かんのしょう菅野翔」

「はい。」

一人の男の子がステージに上がる。

（え？シヨウ？なわけないか。。。）

と思い、目を下に戻すと女の子が騒ぎ出した。

「うそーあんな子が学年1位？そうには、みえないけど可愛い！！」

「なんか、モデルとかしてそう！！」

女の子の黄色い歓声が聞こえた。

（どんなやつだよ。。。）

また、あきれてながら前をみた。

心は驚いた。

・・・シヨウ？

第18話 新学校生活

・・・え???なんでシヨウが?・・・

心は一瞬目を疑った。

でも、それはアキの一言で目がさめる。

「あれ・・・シヨウ君だよね?」

アキも驚いている。

シヨウは普段の行動を見ていて別に頭も良いわけでもなさそうだった。

だって、あの海に行った時はもう受験の2週間前だった。

どこからそんな余裕がでてくるのか不思議だった。

「へえ〜シヨウ君って頭めちゃくちゃ良いんだね!!」

アキは私に喜んであげなよって言ってるようだ。

「・・・・・・・・。」

「ココ?」

「・・・・・・・・。」

私は頭が真っ白になった。

そのまま、入学式は終わった。

シヨウが入学しただけならまだわかる・・・でも・・・。

今日は、入学式だけだったので昼で終わりだった。

チャイムが鳴り、みんな帰るとき先生の一言でまた私の頭は真っ白になる。

「あ・・・そうだお前ら!!」

みんな、先生に注目する。

「今日、1年の菅野翔があいさつしただろ? あいつ、今年の生徒会長だからな!!」

だからみんな翔になんか提案したいことがあつたら言えよ!!」

また、女子の黄色い声が聞こえる。

「私、さっそく行ってみよ!!」

「わたしも行く!!」

いつせいに行ってしまった。

「ココ? どうする? このままだと高校生活、シヨウくんと過ごせなくなるよ!!」

「・・・・・・・・える。」

「え??？」

「アキ!!!もう帰ろう!!」

「え???」

私は、アキの手を握りそそくさに帰った。

私は怒ってたのか、さみしかったのかわからなかった。

それとも・・・嬉しかった?

でも、言えるのは。。。

私はすごく・・・やきもちをやいていた。

第19話 嘘

「ねえ!!」

アキは、私についてくる。

「……。」

「もう!!」

アキは、心の腕をつかんだ。

「!!」

「聞いてる?」

アキは息が荒い。

「あ、ごめん。ぜんぜん聞いてなかった。」

「どうしたの??」

アキの目がまた子犬ビームに変わった。

「……別に。。。」

心はアキの目からそらした。

「シヨウ君に今から逢って来なよ!!」

「え？」

「ココ・・・どうして？って顔してるよ！-」

アキの真剣さが伝わってきた。

「いいんだよ。シヨウ、忙しいから。」

「だめ！-」

アキの大声に心はすごく驚く。

「ココは自分の気持ち言わなかったからあんなことになったんだよ??もう、逃げないで

シヨウ君にまっすぐに走っていきなよ！-そうじゃないと、いつまでも私心配だよ。。。」

アキが心の制服をつかむ。

（かわいい・・・アキ。）

「わかった。言ってくるよ。。。」

このとき、私はアキに嘘をついてしまった。

じつは、あのあとシヨウになんか逢ってない。

ごめんね・・・勇気が出なくて。。。

だって、彼女なら教えてもいいでしょ？

でも、あのあと以来電話１本もメールの１通もなかった。

私はすごく心配してた。

じつは、私のかんちがいかもしれない。

そう．．．．．思ったから。

だって、あのあとシヨウに逢いにいったけど．．．．．。

シヨウは、私にも見せない顔を女の子に見せていた。

すごく楽しそうだった。

すごく仲良くて、入りこめない不陰気だった。

私は．．．．．甘えられなくもなっていたらしい。

第20話 休日のある日

私は、やっと気づいた。

私は人に甘えられないんだ。。。

少し・・・シヨックだった。笑えられるようになったのはうれしいけど、また大きな壁が出来た。

今日は、入学式が終わって久々の連休。

私は、ベットでゴロゴロ。

〃ピピピピ　　ピピピピ〃

携帯が鳴る。

シヨウじゃないことは確かだった。

シヨウは、生徒会長という役で連休もないって先生が言っていた。

「はい。心です。」

「あー!!ココちゃんだあ!!」

シヨウの声。

(え???今日は仕事あるんじゃないっけ?)

そのとき、私は悟った。

先生は、シヨウの人気っぷりをみてみんなに嘘をついたんだ。シヨウの仕事の邪魔に

ならないように。。。。それで、先生も私がシヨウのおっかけだと思
って。。。。

「今日はどうしたの？」

心は、少し明るい声で話した。

「いや、ちよつとさあ。。。。」コちゃんの声が聞きたいなあ。。。。
って思つて。」

心は顔が赤くなったのも自分でわかるくらい照れていた。

(シヨウのばか!!うれしいことばつか言っちゃって。。。。)

「もう、きょう仕事ないの？」

「ううん。これから仕事です。」

と残念そうなシヨウの顔が浮かんだ。

そう思うと、なんだか可愛い。

「ねえ、いまから会おうよ!!俺、心ちゃんに逢いたい。」

と寂しそうに言う。

「わかった!!!」

心は、急いで玄関をでた。

すると・・・

「おはよ。ココちゃん。。。」

笑顔で待っていたのはシヨウだった。

「え？ずっと、ここにいて話してたの？」

「うん。そうだよ。言ったじゃん。今すぐ逢いたって!!」

心は、シヨウを抱きしめた。

「ありがとう。」

「コ・・・ココちゃん?？」

シヨウはこれには驚いた。

「家・・・入る?」

「うん。」

シヨウの一つ一つの嬉しいことが私の満たされない心を満たしてくれる。

さすがだね。。シヨウ。

第21話 休日のある日2

「へえ、ココちゃんの部屋ってなんか思ってたのと違うなあ。」

「どんな感じだと思ったの？」

と心はカップを口から離した。

「うーん・・・なんかアダルトな感じ??」

「ちがいます!! 私は、そんなに大人じゃないもん。」

とムっとした。

「嘘、ココちゃんの部屋はこうゆう感じだなあって予想ついてたよ!!」

「なんか・・・それって怖い。。。」

と引いた感じで言うと、

「なんだと!!」

とショウが後ろから抱きついてくる。

「もう!! ショウってば!!」

私は、また笑う。

すごく、楽しい時間。今まででは、考ええられなかった。

心は、シヨウのほうを見た。

シヨウはこっちを見つめる。

（なに？また、シヨウが私をバカにしようとしてんなー！！）

「ココちゃん・・・目閉じて。」

そこでわかった。シヨウは私にキスしようとしてるんだ。

（え？でも、どうしたらいいの？私、初めてだし・・・。

でも、シヨウとならー！！）

心は、目を閉じだんだんと近くなっていく。

唇があと1cmとゆうところでチャイムがなった。

ピンポーン　ピンポーン

（もうー！！ちよつとだったのにー！！）

心は、残念な気持ちで玄関に行くとお姉ちゃんのまきちゃんだった。

「まきちゃん？？どうしたの？」

「私・・・しばらくここにいます。」

といて、入ってきた。

このときは、ぜんぜん気づかなかった。

まきちゃんは、どんなことがあつて戻ってきたのか。

わからなかった。。。。

第22話 休日のある日3

真紀ちゃんが1週間ぶりに帰ってきた。

真紀ちゃんは、彼氏のところで暮らすと言って家を出た。

それ以来からぜんぜん連絡がなかった。

「真紀・・・ちゃん？」

心配そうに真紀を見つめる。

「ん？私は、大丈夫だよ。。。ちよつと、ココに会いたかったから。。。」

少し暗い真紀ちゃん。

（ぜったいなんかあった！！）

でも私は、それからはなぜか聞き出せなかった。

あんなに元気でお姉さまって感じだったのに今は、ぜんぜん元気がない。

「お姉ちゃん・・・はい。」

心は、ココアを差し出すと笑顔でココアを飲んだ。

「ありがとう。」

今まで、あまり笑顔とか「ありがとう。」など普段は口にしない真紀ちゃんが今日は違う。

笑顔がなんかゆるくていいんだけど・・・なんか悲しい笑顔。

（ん??なんか忘れているような・・・。）

心は思い出した。

「・・・シヨウ?」

恐る恐る、聞いてみた。

「ん??なに。」

少し怒り気味!!

シヨウは、体育すわりをしながらほっぺを膨らます。

「どうせ、おれなんてそうゆう対象だからな。」

（あ・・・わかった!!やきもち・・・かな?）

「やきもち?」

と心はシヨウの顔をのぞき見る。

「ち、ちげーよ!!バカ!!俺がやきもち・・・や、やくわけないだろ???」

とあせってる。

（かわいい。。。）

このときは、なんでそんなことしたのか私は予想してなかったけど・
・。。

たぶん、シヨウが愛しかったからだ。

心は、シヨウのホッペにキスをした。

「そうゆう所も・・・大好きだよ。」

「！！・・・バカ。」

シヨウは照れていて、あまり顔を見せてくれなかったけどすごく愛
しかったのは

覚えている・・・。

第23話 アキへの笑顔

今日も学校は一人で行った。

シヨウを誘ってみたけど、みんなが見てると恥ずかしいし、女子に絡まれるのは嫌だと言って

今日も先に行っちゃたらしい。

（どうせ、シヨウはみんなに冷やかされるのが嫌か、私といるとややこしいことが起こるから

嫌なだけじゃん・・・。）

少し怒り気味で歩いていると、アキが来た。

「ココ～!!おっは～!!」

でも、アキがいるとなぜかその怒りは消えていた。

「どうしたの? いいことでもあった?」

「うん!!」

アキは私の腕をつかみ、ニコニコしている。

「何? 教えてよ。」

「え～??? 忘れたの? ココ。昨日、メール送ってくれたじゃん!

「！」

「え？それだけで喜んでんの？」

心は、啞然としていた。

「だって、前もココがメールあげるって言うてくれなかったじゃん。」

（あ・・・そういえば、あの時は変な人に襲われてメールどころじゃなかったもんな。）

と昔の思い出にひたっていた。

（あれ？そういえば、昨日送ったのって、おやすみぐらいしかおくってないような。。。）

アキは私に一言のメールをもうらっただけでこんなに喜んでくれた。

かけがない親友。

心は、アキの手を握った。

「？ココ？」

「私達は、ずっと友達だよ。」

恥ずかしかったけどアキに言えた。

アキは、涙をながしながらうなずいた。

こんなに可愛くて、純粹で私のことを親友として想ってくれてるアキが私は嬉しかった。

学校に着くと、いきなり目についたのはショウと・・・たくさんの女の子。

「何あれ！！菅野くんあんなに女の子に囲まれて。」

アキが指をさす。

「アキ・・・指をさすのはやめなさい？」

と心が落ち着いた口調で話す。

「いいの？あんな一緒にいてくれない彼氏を他の女の子が一緒なのは・・・。」

「そうだけど、ここは我慢しなきゃ。」

「うん！！それまで、私がココという。」

心はアキに顔を向け、微笑んだ。

「・・・アキ、ありがとう。」

「・・・・。」

アキはあまりのことで驚いている。

「？アキどうしたの？」

「笑った……。」

アキがつぶやいた。

「え？」

「ココが笑った!!」

アキは心に抱きつく。

「え？」

心もあまりのことで理解ができなかった。

でも、すぐにわかったのは私……やっとアキのまえでも笑えるようになったんだ。

第24話 ショウの気持ち

アキとはますます仲が良くなってきたけど、ショウとはあまり仲は良くなってきた。

最近まで、メールをしてたがめんどくさくなって心はぜんぜん送ってなかった。

私のこと、ぜんぜん大切になんかおもってないじゃん。

そう思うようにまでなってしまった。

逆にアキのメールを返すとすぐに返ってくるから、毎回送ってる。

「あ……ショウからだ。」

心は、携帯を閉じる。

（なんで、私が怒ってんのわかんないかな？）

昨日、私が廊下でショウが前、遊びにきたとき時計を忘れていた。

それをわざわざ、となりの校舎までわたしにいったのに……。

「え……？わざわざ届けにきたの？」

ショウは、平然としている。

でも、私が気になったのは周りでショウの同級生の女の子の痛い目

線だった。

「うん。」

心は、早く教室に帰りたかった。

でも、それはシヨウの一言で私は、シヨウの気持ちを疑ってしまった。

「別に・・・持ってこなくていいのに。俺、忙しいから・・・。」

私は、放課後アキにそのことを話した。

「ええ〜？???ふざけるなあ!!菅野くん、何考えてんの??」

アキは私と一緒に怒ってくれた。

「そう・・・思う?」

「え?」

アキが私を見て驚いてた。

だって、私が泣いていたから。

初めてアキの前で泣いちゃった。

あのと、シヨウからメールがきたけど無視し続けた。

心は、あともう少して夏休みだということに気がついた。

（どうしようかな。。。夏休み、今年はひとりじゃん。）

毎年、夏休みを一人で過ごした時間は1分もなかった。

男と海外旅行をしたり、どこかでかけたり。

でも、キスとかその・・・まあHとかは1回もしたことがなかった。

私が拒んだんじゃない。男がしないだけ・・・。

遊ぶだけの女だったから。ちゃんと男には、本命の彼女がいて彼女と遊べない日は私を

呼び出す。そうゆうシステムだった。

でも、最近・・・電話番号を変えてそうゆう電話をこなくした。

全部・・・シヨウのためなのに。

心は、なんか昔のことを思い出したくないのでそのまま寝てしまった。

そのころアキは、シヨウと会っていた。

「ねえ、菅野くん。心となんかあった？」

「え？別に・・・。」

「心・・・泣いてたよ。」

第25話 ショウの気持ち2

「・・・ええ???」

ショウはことの重大さにわかった。

「どうして、あんなこと言ったの?」

アキが真剣にきく。

「はあ???だって・・・」

「言い訳しないの!!!」

アキが机をたたく。

「いや、待って!!!だって、おれ昨日、風邪でずっと家にいたんだけど。」

「・・・え?」

すると、ショウの部屋のドアが開いた。

「ただいま!・・・あ。ごめん、お取り込み中だったね!!!」

その人は、ショウに少し似ていて大人っぽい人だった。

「もしかして・・・兄貴!!!お前、変装して俺の学校に行って、心と会っただろう!!!」

「はあ？おれ、知らないし。」

「じゃあ、だれだろう。。」

アキは、シヨウの悩む顔をみて、少し安心した。

「ねえ、菅野くん。ココのこと不安にさせちゃダメだよ。」

「？」

「だって、ココがずっと菅野くんのこと好きでいられる自信なんてないでしょ？それに菅野君

と別れようかって言ってたよ（うそ）」

「ええ！！」

アキは、シヨウにそう言って帰っていった。

シヨウはベットに寝そべって、考えていた。

（そういえば、最近、心と遊んだり、しゃっべてないし。しかも、メールの返事もくれなくなっ

たし。。。本当にココに嫌われっちゃたかなあ。）

シヨウは、心のことを想いながら目を閉じた。

すると携帯がなった。

「……はい。もしも。。。」

シヨウは心のことで悩んでいて元気がない。

「もしもし。。。」

シヨウはガバッと起きた。

「ココちゃん???」

「うん。最近、メール無視しててごめんね。。だって、シヨウが
あんなこと言うなんて

思わなかったんだもん。。。」

心は泣き出してしまった。

（そんなにひどいことをいったのか??その二セシヨウは!!）

「あのさあ、そのことなんだけど……。」

シヨウは、全部話した。

「だから、あれは俺なわけがないんだよ。。。」

「本当?信じるよ?」

「うん。。信じて?」

心の、信じるよ、とゆう一言で俺は、顔が赤くなってきた。

心を愛しいと感じた。

第26話 ショウの気持ち3

〃ピピピピ ピピピピ

目覚ましはまだ、眠そうな心を起こす。

心は、ぐちゃぐちゃな髪をとかしてアイロンでまっすぐにした。

朝食もあまり食べないで制服の準備をした。

心は、昨日から気になっていたことがあった。

真紀ちゃんのこと。

心が、真紀ちゃんの部屋をこっそり開けると真紀はベットでぐったりしていた。

「・・・真紀ちゃん。。。」

心は心配でしようがなかった。心は、シスコンっぽいところもあったためにすごい心配していた。

いた。

真紀は心の4歳年上で21歳だった。恋より仕事が大事だった真紀の仕事はエステシヤンの

社長だった。

でも、そんな真紀ちゃんがあれだけ母や父を嫌ってこの家を出て行ったのになんで戻って

きたのかわからない。

聞きたいけど、聞いちゃいけないような気がした。

「真紀ちゃん、行ってくるね。」

と小声で言ってから玄関を開けると、そこには心の大好きなシヨウがいた。

「・・・おはよう。」「コちゃん!」

シヨウの笑顔は輝いていた。

「待ってたの??」

「うん。だって、昨日アキちゃんに登校、なんで一緒にいってやらないの??って言われて

俺言った覚えがなくて。。俺、そんなもつたいない事しないよ?ニセシヨウはひどい

こと言ったかもしれないけど、俺は言わない。一緒に行こう?」

と手を差し伸べてくれた。

「・・・うん。」

心はうなずいた。

「ねえ、誰だと思っ?？」

とシヨウがいきなり唐突にきいてきた。

「え？」

「だから、ニセシヨウ。俺に相当、似ていないと心が間違っはずないし・・・。」

「うん、そうだね。声もすごいそっくりだったあ。」

「そいつ見つけたらいっぱいこらしめなきゃなあ。」

シヨウは笑顔で言う。

「なんで？」

心は首をかしげる。

「だって、俺のココを泣かせるようなこといったんだろ?？」

シヨウは、心の頭に手をポンッと置いた。

心は、シヨウの気持ちを信じた。

第27話　ちよつとした不安

―生徒会室―

「ねエ、いいの？ここ・・・生徒会室だよ？」

心は恐る恐る入る。

「大丈夫だよ！！だって今の時間、俺達しかいないから。」

シヨウはそう言って、書類をあさっていた。

（え？てことは・・・2人きり？？）

心はちよつと期待していた。

でも、シヨウはなかなか近づいてこない。

「どうした？俺の顔になんか・・・ついてる？」

シヨウはボケつとした心を見て、ちよつと笑う。

「え？？う、ううん。ごめん・・・ぼうつとしてた。」

心は、顔が赤くなる。

「ふうーん。」

と言って、また書類に目を落とした。

（だって・・・シヨウがめがねかけてるの見たの初めてだったし。。）

心は、少しため息をついた。

「ごめん。ココ、つまないよね。」

シヨウは、心のため息がきこえたのか、心配してきた。

「いや！！そういう訳じゃないよ！！」

と心は我にかえった。

「今日はいいや。もう帰ろう？」

と少し微笑んで、心の手をつないだ。

「・・・うん。」

心は、恥ずかしかった。

なんでこんなにシヨウは私より大人なの？

私・・・情けない。。。普通は、年上の女なら気をつかわなきゃいけないのに・・・。

どうしたら・・・。

「ねえ。」

心は下を向きながらボソつと言った。

「ん？何？」

シヨウは、笑顔だ。

「あの・・・さあ。」

心は言う寸前でシヨウが止まった。

心は、前を見ると恋人がDキスをしていた。

「・・・あ。」

心は、顔があかくなる。

（初めてだしィ。こんなまじかで人のキス見るの。）

「・・・行こう。」

シヨウがつないでいた手を離れた。

「！」

「ああゆづのって困るんだよね。特に学校だと。」

シヨウがあきれた顔をしている。

（あのこと言わなくて良かった。”キスして”なんて言ったらあ

きられてかも。」

心は、少し安心した。

「シヨウは……ああゆづの苦手なの？」

と聞いてみた。

「……うーん。まあ、苦手……なのかな。」

「そ、そうなんだ。」

心は少しがっかりした。

帰り道はなぜか会話が見つからなかった。

ちよつとシヨウとやっていけるか心配になってきた。

第28話 心のお母さん

「ただいまあ。」

心は元気がなかった。

「あ、おかえりイ!! ココちゃん!!」

「……。」

(……え? なんでいんの??)

「どうしたの?? ナギちゃんに会えてうれしくて言葉、失っちゃた??」

その人は、どう見ても20代の女の人で、髪は肩ぐらいの髪の長さ。身長は高く、とても綺麗な人。でも、私が一番嫌いな人。

「なんで、お母さんがいんの??」

すると、その人は心のホッペをグーでなくった。

「お母さん」って呼ぶなっつてんだろ?? そんな年じゃねんだよ!!」

いきなり性格や口調が変わった。

「……ゴメン。ナギちゃん。」

「わかればいいんだよ!」

もう、お姉さま気分のこの人は心のお母さんだった。

「あ!!--そうだあ。ココちゃん!!--真紀ちゃん、この家に帰ってきてるんでしょ?」

とまた、かわいいママに戻った。

「うん。そうだけど・・・。」

(なんで・・・知ってるの??)

「でも、真紀ちゃんはいまさら私なんかに会いたくないか!」

と笑っている。

実は、姉が家を出る2日前、大変なことがあった。

あれは、思い出しくはなかった。

とても、悲惨だった。そのせいでお父さんもいなくなってしまったし・・・。

あれは、まだ姉が学校から帰ってきてなかったとき。

「ただいま!」

と真紀ちゃんは、普通どうりに帰ってきた。

（あれ？お母さん帰ってきてる。めずらしい。いつもは、朝帰りなのに。）

すると、部屋で声がした。

（あーあ。またか……。お父さんがいなくなってからいろんな人、家につれてくるからなあ。

困るんだよね。。。まだ、純情な心だっているのに……。）

そのとき、真紀ちゃんはちょっとした興味で耳をそばたてた。

「……。あ……。ダメだつてばあ。もう。」

お母さんは、笑っているようだった。

真紀は、そつと扉を開けると裸の男とお母さん。

（うわぁー！！）

真紀は、顔が一気に赤くなった。

「すげーきれいですね！！さすが、真紀の」

と言うところをお母さんは、人差し指を口に当てる。

「言っちゃだめよ。。。真紀ちゃんに知られちゃう。あの子、すぐおこるから！ー！」

「わかった。。。ねえ、まだ、ここでやっていたい。」

「いいわよ。。。真紀ちゃん、今日はアルバイトでおそいから。」

なぎちゃんは、そこで真紀ちゃんの彼氏と寝ていた。

それは、真紀ちゃんの心に傷がついた。

第29話 ナギちゃんの過去

ナギちゃんとは、リビングにいてもなにも話さなかった。

もう、時計の針は6時をさしている。

”ぴぴぴぴ”

と携帯がなった。

(ラッキー!!)

重苦しいふいんきから抜け出せると思った心は、リビングから離れようとした時、ナギちゃんが

やっと口を開いた。

「いいよ、ここで話しても。」

ナギちゃんは、タバコを吸った。

「あ、ありがとう。」

心は、携帯にでた。

「はい、心ですけど・・・。」

すると、元気な声がした。

「ココー????今、何してた?」

(シヨウだ……。)

「え〜つと……今、お母ちゃんなくて、なぎちゃんといるよ。」

「え?なぎちゃんってだれ?」

「うーん、お姉ちゃんとゆうか、なんとゆうか……。」

「えー!!!!俺、見たい!!!!」

シヨウは興味津々だった。

「え?ちよつと、待って。」

”っーっー”

携帯がきれた。

(本当に……来たりしてね。)

心は、ため息をつくとなぎちゃんが話しかけてきた。

「何?彼氏?」

「え???まあ、うん。」

心はキョトンとしている。

「やっぱりね。」

ナギちゃんが少し微笑んだ。

「なんでわかるの？」

心はきいてみた。

「だって、男に悩んでる顔だった。なんてゆうか、幸せなんだけどそれだけじゃ足りないみたいだね。」

（すごい・・・あたってる。）

「ナギちゃんも・・・そうゆうこと・・・あつた？」

ナギちゃんは、少し驚いていたけれどなんか表情がゆるかった。

「うん、あつたよ。タイチくんかな？」

”タイチくん”とは、私たちのお父さんのこと。

タイチくんは、私が生まれる前からいなかったらしい。

だから、ナギちゃんは私達をここまで育ててくれたんだ。

「タイチくんってどんな人だった？」

「ん・・・？すごいカッコイイよ。やさしいし。でも、残念なことはココちゃんの顔をあの人は」

「1度も見たことがないことだな。」

（それは、初耳だった……。）

「なんで……知らないの？」

と慎重に聞いてみた。

「だって……仕事でいろんなところ行ってたし、私達は恋に落ちてはだめだったから。」

「……。」

「とゆうかね、真紀ちゃんもいることも黙ってた。」

ナギちゃんは悲しそうな目をしていた。

「なんで……？」

「ココちゃんは、いろんなこと聞きたがるね。だって……タイチとは、義兄弟だったから。」

お母さんやお父さんに知られたら……やばかったから。」

ナギちゃんは、本当に何か物足りなさそうだった。

こんなナギちゃん……初めてだった。

第30話 ナギちゃんの過去2

「よく黙ってられたね。」

心は、悲しそうな顔をした。

「そう？まあ、私にはなんとも無かったけどね。」

と笑顔のナギちゃんを見て、心はすごいなあと思った。

「私・・・その話・・・聞きたい。」

「え・・・。」

ナギちゃんは、悲しそうな顔で私をみた。

すると、チャイムが鳴った。

「ちょっと、行ってくる。」

心は、玄関を開けると真紀がいた。

「ただいまあー!!」

真紀は、少しご機嫌で帰ってきた。

「あのね・・・いま、ナギちゃん帰ってきてるの。」

心は、やっこの思いで真紀に言った。

「はあ????あいつ、いんの??」

真紀は、舌打ちをした。

「ねえ、今ならナギちゃんの話、聞けるかもよ?」

心は、部屋に入ろうとしている真紀に言った。

「・・・。」

「知りたかったんでしょ??いろいろ聞きたかったんでしょ???」

心は、声を張り上げた。

「うるさいなあ!!ココは、あっち行ってよ!!」

とドアを閉めようとしたとき、いきなりドアから手が伸びてきた。

「!!--」

真紀は驚いた。

「真紀も聞いて。今なら全部・・・話せる。」

それは、ナギちゃんだった。

「なんで今なのよ!!私・・・疲れてるから!!」

真紀は、ドアを閉めようとしたが、ナギちゃんの力で閉まらない。

すると、ナギちゃんは土下座した。

「ごめん！真紀ちゃんの好きな人、奪ってごめん！本当にごめん
！！」

一生懸命に謝った。

「ちょっと・・・やめてよ！！」

真紀はたじたじになっている。

「今だから・・・お願い。」

ナギちゃんが泣いたところ・・・初めて見た。

第31話 ナギ物語

私は・・・強くなかない。

ただ、強くならなければならないんだ。。。。2つの宝物を守るために。

「ナギイー!!」

と1人の男の子が走ってくる。

その子の名前は”タイチ”私のお兄ちゃん。

「何？」

「今日は、学校休みだから遊ぼう??」

「はい!!」

私はあのころは、まだ小5だったし、社長令嬢だったから遊ぶのもだれか1人ついていなければ

ばならないほどだった。本当につまらない生活だった。

でも、タイチくんとはなによりも楽しい時間だった。

「ナギは、小学校楽しいか？」

「ううん。ぜんぜん。」

「そうかあ。」

そう言つて、そんな時は、タイチくんが私の頭をなでてくれた。

でもまだそのときは、別に兄弟として好きだった。

私が・・・14歳になるときまでは。

「ねえ、兄貴？」

私は、タイチくんと呼ぶのはやめた。

だって、ブラコンって言われるのは嫌だったし少し反抗期だったから。

「ん？何？」

って笑顔のタイチくんは好きだけど・・・そんな恋は実らないことくらいわかっていた。

だから、あつたていた。

「今日も彼女つれてくんの??」

「うん・・・ダメだった？」

いつも、ホンワリタイプのタイチくんは純情そのもだった。

「別に・・・でも、いつも勉強の邪魔だから。」

とにらんだ。

「ごめん。」

そういつて、また笑顔を見せる。

（どうせ、私のこと子供だっと思ってるくせに……。）

”ピンポン”

とチャイムが鳴る。

（彼女だ……。）

そう確信すると、私はいつも部屋にこもる。

でも、今日に限ってタイチ君の部屋に忘れ物をした。

（めんどくさ）

そう思って、こっそり部屋を開ける。

すると、ナギの目に衝撃が走った。

「タイチィ……。早くきて。」

とタイチの彼女がタイチ君のベットで裸になっていた。

（え……。。）

「ごめん・・・俺には・・・無理だよ。」

タイチくんが泣いていた。

「早くう・・・もうじれつたいなあ。」

といきなりタイチくんの胸元をつかみ、キスした。

「もう・・・やめろ・・・。」

すると、ナギはタイチと目が合った。

「な・・・ぎ。」

私は、もうそのとき、迷いはなかった。

「ちょっと、何やってんの??？」

ナギは、ドアを思いっきり開けた。

「ちょっと・・・何いきなり開けてんの？」

彼女は、すごいにらんできた。

「さわんないで!!」

「はあ???うざ!!もう、帰る!!」

と彼女は着替えていそいそと帰った。

タイチは、＼シャツをちゃんと着替えなおした。

タイチとナギは、リビングでソファに座った。

「なんで、嫌がってんのに無理にやらせるのかあ??本当にひどい
! !」

ナギは、怒っているとタイチは笑った。

「何?」

ナギは恥ずかしくなった。

「だって・・・俺、嫌われたのかと思ったあ!最近、俺といるとす
ごいざそうにするじゃん?

すごい心配したんだよ??」

「そう?」

「やっぱりさあ、嫌じゃん? 同い年なのにお兄ちゃんって。」

なんでそんなに愛おしい目で私のことみるの?

やめてよ・・・。気持ちがあふれるじゃん。。。

私は気づいたら・・・タイチちゃんと寝てた。

イケナイことってわかっておきながら。。。

第32話 ナギ物語―妊娠―

あれからタイチくと愛し合ってきた。

それは、幸せだけど親に対する罪悪感もあった。。。

「・・・ナギちゃん？起きてる？」

愛おしい声が私を呼ぶ。

「うん。。。何？」

「これからも・・・俺のこと愛してくれるよね？」

タイチくんは照れてるのがわかった。

「うん・・・。じゃあ、私も愛してね。」

「当たり前じゃん。」

「だから・・・私以外の人に・・・やつちゃ嫌だよ？」

困ると思ったけど、タイチくんはためらわず、私を抱くしめてくれた。

私は、このまま続けばいいと思った。

でも・・・続かなかった。。。

その後、私は親に呼ばれた。

「お母さん・・・あんたに言いたいこと・・・あるの。」

「なにイ？」

私は、真剣には聞いてなかった。

「タイチとナギは・・・本当の兄弟じゃないの。」

「・・・・・・・・。」

（え・・・？）

私は、持っていたお菓子を落としてしまった。

「このこと・・・タイチくん・・・知ってる？」

「いいえ・・・。タイチは・・・一番傷つくと思って・・・。」

「え???どうゆう意味???おかあさん??」

お母さんは、目に涙をためて謝った。

「タイチは・・・私の子じゃないの!!!お父さんの愛人の子なの・・・。黙っててごめんなさい」

本当にごめんなさい。。。タイチ。。。」「

私は、さとした。。。

私達は、愛し合っではいけないんだあ。

じゃなきゃ・・・お母さんが可愛そう。。。

ごめね。。タイチくん。。。

私は、家を出た。まだ、14なのに・・・だって、タイチくんといたら愛し合ってしまうよう

な気がした。

でもそれは・・・自分を苦しめていただけかもしれない。

1人で暮らすようになってから1ヶ月たって、体調がいきなり悪くなった。

病院に行くと、結果が出された。。。”妊娠”

頭が真っ白になった。タイチちゃんと離れたくて、離れたのに別の形でタイチくんのそばに

いることになった。

14という若さで私は、子供をさずかるんだからそれなりには決心が必要だった。

最初は、中絶しようと思った。

でも・・・出来なかった。

お母さんにも相談できないし、タイチくんになんかもってのほかだった。

そのつらさが、お腹が大きくなるにつれて世間の人の目は厳しくなる。

1回、自殺も考えた。

そのとき、ふとタイチくんの笑顔が見えた。

”もつとがんばって”そう聞こえた。

その日から私に力を貸してくれる人が現れた。

彼女はわたしより10才も上で小さいころからの幼馴染。

私の唯一の親友でもあった。

名前は、”なつき”だった。

私がつらいとき、いつも一緒にいてくれた。

なつきは、産婦人科の医者でもあったし勇気強かった。

なつきのおかげで、私はかわいい女の子が産まれた。

名前は”真紀”とゆう名前にした。

そのとき・・・決めた。

この子は、だれにもわたさない・・・。

第33話 ナギ物語―再会―

そのあとから、私はアルバイトをした。

そのとき、真紀ちゃんはいつも私の後ろにいる。

でもそのおかげでいっぱい頑張れた。

「真紀ちゃん！！眠いでしょか？」

私は、赤ちゃん言葉で真紀ちゃんにはなしかけるのが好きだった。

「う・・・だあ！」

真紀は、いつも返事を返してくれた。

2人で幸せだった。

でも、やっぱりタイチくんのこと忘れられない。。。

気持ちを押し殺して我慢していた。

夜になると、涙で部屋が湿るくらい泣いた。

「ごめんね・・・タイチくん。」

いつも泣いていた。

そのとき、ふと思った。この子が3歳になってから1回だけ会って、

それで忘れよう。

そう思った。

そんなことを思っていると、時は早かった。

「いいの？本当に後悔しない？」

なつきは、私を心配してくれた。

私はとうとう、タイチくんと会うことにした。

「大丈夫！！真紀ちゃん、お願いね！」

笑顔で手をふって、タイチくんのもとへ向かった。

タイチくんは、まだ家にいるそうだ。

でも、お母さんはお父さんと旅行中らしい。だからこの日にした。

この田舎もすごい懐かしい。

すごい小さいころは、お嬢様っていわれたのに今は3児の母。

私はタイチくんに会う前にお気に入りのお気に入りのところへ行った。

そこは、夏にだけしか見れないヒマワリ畑。

ここは、私とタイチくんの大切な思い出。

「はあー!!! いい気分!!!」

こんな気分になったのはお久しぶりだった。

私は、時計を見た。

(もう・・・11時かあ。)

でも、こんなに天気がいい日はなかった。

「・・・行くか。」

私は、立ち上がると後ろで声がした。

「・・・ナギちゃん?」

「!?!」

後ろを振り返ると、あのタイチくんがいた。

「・・・タイチ・・・くん。」

私は、”タイチくん”と言う前にタイチくんは、私を抱きしめた。

あのぬくもりがまたよみがえる。

「ごめんね・・・ほんとうに・・・ごめん。」

私は、何度も謝った。

「お願いだから黙ってて!!」

すると、タイチくんは私にキスをした。

ほら、どうせそうやって流されるんでしょう？また泣きたくなくなるでしょう？

でも、言葉だけではこの思いをタイチくん届けられないと思った。

だから・・・私達はまた愛し合った。

いけないってわかってても。。。

今度は、もっと傷つくってわかってても・・・。

「・・・ねエ、ナギちゃん？」

「ん？何？」

「もう・・・お願いだから黙って・・・行くなよ。」

タイチくんは、私の背中で泣いていた。

「泣かないでよ。。。こっちだって泣きたくなくなるでしょ？」

私も大粒の涙を流した。

このまま・・・タイチくんといたい。。。

でも、私には大切なものがある。だから、帰らなきゃいけないんだ。

タイチくんは、ずるいよ……。私もまだ友達と遊びたいよ、まだ学校行きたい。

こんな苦労は、私には重過ぎるよ。

なんて……。残酷なの？今、好きな人とこうしていられるのに時間が限られてるなんて。。。

もう……。会えないなんて。なんでこんなつらいのをまだ18にもならない私が背負わなきゃ

なんないの？

でも……。またいつか会えるよ。

「……。タイ……。チ？ごめんね。もう、いかなきゃ。」

私は、すごい頑張ったと思った。

帰り道も涙でいっぱいだった。

もう、全力で走った。

なにもかもなくしたい気分だった。

このことは、心に閉まっておこう思った。

「ただいまあ。」

「・・・おかえり。」

玄関で待つてくれていたのは、なつきだった。

「うわぁ〜ん!!」

私は、真紀よりも大きな声で泣いた。

「・・・よく・・・頑張ったね。」

私をほめてくれた。

・・・これで終わったかと思った。

でも・・・まだ始まったばかりだった。

第34話 ナギ物語―真実―

「おめでとうございます。妊娠しています。」

また・・・あのときの繰り返しだ。

あの時、タイチと愛し合った結果がまた出てしまった。

でも、あの時よりはだいぶ楽だった。

真紀のときと同じように頑張ればいいんだあ。。。

そう思うと楽だった。

なんとか2人目も元気に産めた。

少し自分をほめたくなった。

まだ、19になるのに4歳の子と新生児を育てるんだから。

「真紀ちゃん??おいで!」

「はぁーい!!わぁ、かわいい!!」

生まれたばかりの赤ちゃんを見て、喜んでいる。

「お名前は?」

「うーん・・・」

するとふと思いついた。あの時に出来た子だから・・・”心”

「心ちゃん!!!!」

「心ちゃん? かわいい名前!!!!」

「でしょう?? 真紀ちゃんもお姉ちゃんだから頑張ってね!」

「うん。」

あのときは、まだ親子関係は安心していた。

でも・・・私はその1つの宝物を捨ててしまった。

あれは、私が28のときだった。

真紀に年上の彼氏が出来たらしい。

「それがね!!!! すごいクールで!!!!」

「へエ、よかったじゃん。」

私は、別にそうとしか思わなかった。

真紀が幸せならば・・・。

そう思った。

でもそれは、あの日以来で変わってしまった。

”ピンポン”

とチャイムになる。

「はぁーい。」

と玄関を開けると、1人の16ぐらいの男の子が立っていた。

「あの・・・」

私は、誰かを聞いてみた。

「あ、ぼくは真紀さんとお付き合いさせてもらってる橘たちばなです。」

「ああ！ー真紀の彼氏！ーじゃあ、どうぞ。」

と橘くんをあげてしまった。

2人でリビングで話した。

「あの・・・失礼ですが、今おいくつなんですか？」

と橘くんが話しかけてきた。

「え・・・28です。」

「えー！！28なんですか？？若いですね。」

と橘くんは笑顔で答えていた。

「なんか・・・欲しくなちゃった。」

橘くんがいきなり、私の首元に唇をすべらせた。

「やー!!やめてー!!」

すると、橘くんが白い布を私の口にやった。

それからのことは、覚えていない。

でもまちがいないのは、あの白い布は催眠薬がたくさんしみこませていたにたがいなかった。

私がもうちょっと、しっかりすればこんなことにはならなかった。

私は、真紀だけではなくタイチくんまで裏切った。

あのあと、すごい悔やんだ。

真紀は家を出て行くし、心はなぜか夜まで帰ってこなくなった。。。

私は1度に2つの宝物を失った。

ごめんね……。真紀……。タイチくん。。。

第35話 タイチくん

「まあ、こうゆうことなの!?!」

ナギちゃんは、無理に笑った。

「ナギちゃん!?!もう、無理しないでよ!?!」

心は、目に涙をためていた。

「・・・ココちゃん。」

「そうだよ。よかった、ナギが本当のこと話してくれて。」

真紀も微笑む。

「ごめんね。真紀ちゃん、ココちゃん。」

ナギちゃんは、安心したのかやっと本音が出た。

「戻っておいでよ。」

心は、ナギをなだめる。

「ありがとう。」

ナギはこれまで見たことのない笑顔を見せた。

すると、”ピンポン”とチャイムが鳴る。

「待つてて！たぶん、シヨウだと思う。」

心は、なんか軽い気持ちでなんかやつと晴れた。

「はぁーい！！」

玄関を開けると、やっぱりシヨウだった。

「シヨウ！！待つてたの！！」

「あれ？？なんか機嫌いい??」

シヨウは、微笑んでる。

「あ！今日、俺のいとこ連れてきた！」

よく見ると、隣に背が高く、歳は・・・ナギちゃんと同じくらい？

「こんばんわ。あの、最近シヨウが反抗しなくなったのでどうしたのか問い詰めたら、彼女が

いるって聞いたから、会いたいなあと思って！」

その人は、気はよさそうな人だった。

「あ！どうぞ！」

心は、その人も家にあげた。

「あの、名前は？」

「あ・・・名前ですか・・・？2種類ありまして、名前は”タイチ”
”つていいいます。”」

「!-!」

（タイチってナギちゃんがいつていた人？まさかね、シヨウと私が
親戚なはずないし。。。）

と疑った。

「ねエ、今日誰かいんの？」

とシヨウが心にきく。

「うんとね、ナギちゃんと真紀ちゃんがいるよ。」

心は、リビングに案内する。

「だから誰だよ・・・。」

心は、シヨウの言葉なんて聞いてなかった。

「ねエ、真紀ちゃん、ナギちゃん。1度は紹介しようと思ってたんだけど、私の彼氏の

”シヨウ”私の1つ年下なんだあ。。。あと、シヨウのいとこの
人来てるんだあ。」

とリビングにショウが入ってくる。

「あの・・・こんにちわ。あの、おれ”ショウ”といいます。」

と礼儀正しくあいさつした。

「あれ？いとは？」

「なんか忘れ物したんだって。あとで来るよ。」

ナギと真紀はキョトンとしている。

「・・・どうしたの？2人共。」

「いや・・・かわいいなあ。って」

「それは、いいから2人も自己紹介は？」

と少し大人ぽつくふるまる心。

「あ・・・えっと、心の姉の”真紀”といいます。」

と真紀は、恥ずかしそうに言う。

「あとそれから私は、心の母の”ナギ”です。よろしくね！」

とまた口調がかわいくなるナギ。

「宜しく願います。」

シヨウも緊張している。

「あれ？おそいね。。。シヨウのいとこ。」

と心は、玄関のほうをみる。

「うん・・・だよな。どうしたのかなあ？」

シヨウも心配する。

「え？？そのいとこってかっこいい？？」

とナギは期待している。

「もう！！ナギちゃん！！」

心は、あきれる。

すると、玄関の開く音がした。

「すみません。ちょっと、ケーキを忘れてしまっ……………」

シヨウのいとこのタイチさんは、何かを見て驚いていた。

心は、その目線をたどると・・・

「…………タイチ…………くん。」

「…………ええ????？」

心と真紀はおどろいた。

（この人が・・・私のお父さん。。。）

第36話 愛する

「…………ナギちゃん？」

タイチはいきなりのことで驚いた。

「…………どうして。」

ナギちゃんのあのときの顔は忘れられなかった。

いかにも、満ちていても満たない顔……。私ときと一緒だった。

「なんでここにいんだよ！！！！俺がどれだけ探してたかわかるのか?????」

タイチは激怒していたかと思うと、いきなり安心したかのような笑顔になる。

「…………ごめんなさい。」

ナギは下を向き、泣いている。

「どうしたんだよ。。。なんで、俺のこと置いていったんだよ！」

タイチは、優しくナギを抱きしめた。

ナギは、昔のことを全て話した。

「…………。」

タイチは、ちゃんと真剣にナギの話を聞いていた。

「・・・じゃあ、とゆうことはこの2人は俺の・・・・子供？」

「うん。1番目は真紀、2番目は心。」

少し照れ笑いをしている。

「・・・あんまり実感わかないなあ。だって、どう見ても兄弟な感じすんじゃない？」

でもタイチも嬉しそうだった。

すると、シヨウは心の耳元でささやいた。

「今日は、2人きつりにさせたら？」

「うん！そうする！！」

心とシヨウと真紀は、家を出た。

「あゝあ！！ああゆうのつていいなあ。。。私も彼氏のところに帰ろうかな！！」

と後ろを向き、笑顔で手を振って真紀ちゃんも戻っていった。

「どうしよ。。。今日は、家に帰れないよ。」

「じゃあ、俺んち・・・行く？」

シヨウは照れながら言う。

「じゃあ・・・そうしようかな。」

心は、ドキドキする、

「行こう?。」

シヨウが私の手を繋いでくれたとき、心がホットした。

（どうしよう・・・このまま、シヨウの家に行ってなにもないまま帰ってこれるわけが

ない。どうしよう。。。私初めてなのに！怖い。すごい不安。でも、大丈夫かなって

思う。。。シヨウとなら・・・）

心は、そんなことを思っている間にシヨウの家に着いた。

「どうぞ。」

シヨウは、普通どおりに鍵を開ける。

（私だけなの？こんなにドキドキしてんの。）

そう思うと、恥ずかしくてしょうがなかった。

心はギクシャクしていて、ソファーに座る。

「ねえ僕、先にお風呂はいつていい？」

シヨウのいきなりの言葉に心はまた変な態度をとった。

「え．．．？？ど、どうぞ？」

心の顔が赤いのを見たシヨウは少し笑った。

（鼻で笑われた．．．。）

心はシヨウがお風呂に入っているときに携帯を出し、アキに電話をかける。

「．．．あ。もしもし？アキ？私．．．なんだけど。」

いきなりの心の電話でアキも驚いている。

「え？？？？ココ？？どうしたの？」

「うんと．．．．．実はさあ、今シヨウの家にいるんだけど．．．泊まることになって。」

心の声は少しおびえてるかのようにも聞こえる。

「．．．シヨウくんって．．．鬼畜だね。心を襲うんでしょ？？逃げなよ！！あの男はやばい！」

あんな最低な男やめておきな！」

アキの意外な言葉に心はキレた。

「あのね!! ショウは、鬼畜なんかじゃないの!! 私だって、少しは期待してたんだから!」

すると、電話からクスッと笑う声がした。

「……アキ?」

(もしかしてわざと……。)

「……アキちゃん?」

心が言っても何も答えない。

「言えたじゃん。ココの本音。。。」

アキはそういつて電話をきる。

そうか……。そうだね。

なにもかも思うままにすればいいんだ。

ショウのこと……。好きだから。

第37話 愛しい人

「あ！・・・・・・・・いた。」

シヨウは、お風呂から上がってきた。

「え？・・・・・・・・いちゃだめだった？」

心は、少し不安になる。

「うっん！ココ大好き！！」

シヨウが心に抱きつく。

そりゃあ、怖かった。1人でシヨウのこと受け入れられるかすごい不安だった。。。

だって、好きでもかかえきれなものってあるじゃん？

今、なんかドキドキすぎて足が震える。

「どうした？ココ？」

「・・・・・・・・今日は・・・・・・・・一緒に寝るの？私は・・・・・・・・1人で寝たいなあ。」

心は、顔を赤くしてシヨウに言う。

「・・・・・・・・俺は、どっちでもいいや。」

シヨウははにかんで、冷蔵庫をあけてジュースを飲んだ。

心は、お風呂に入る。

やっぱり・・・シヨウのこと今で傷つけたかな？

シヨウのことはすごくすごく大好き。

でも、それだけじゃダメなのかな？

手を繋ぎたいとか、キスとかはたくさんしたいって思うのにその先は死ぬほど怖い。

心は、お風呂から上がった。

リビングに行くと、シヨウがいる。

「ねえ、ベットがいい？それとも布団がいい？」

シヨウは、笑う。

でもその笑顔は無理して作っている。

「・・・布団がいい。」

心はなんだか情けない気持ちになる。

「・・・じゃあ、ここに敷いておいたから。」

シヨウは、片付けて自分の部屋に行ってしまった。

「……………」

心は、悲しい気分になった。

すると、シヨウが戻ってきた。

「どうしたの？」

心が聴いた瞬間……

「ココ、おやすみ。」

ほっぺたにキスした。

心は、いきなりのことでおどろいた。

「じゃあ！」

シヨウは、本当に行ってしまった。

心は、キスされたほっぺたをおさえた。

ごめんね。シヨウがのぞんでることできそつにない。

私、シヨウのこと好きだけど出来ない。

怖いよ。。。

心は、そう思いながら布団にはいった。

でも、寝れない。優しいシヨウのにおいがしたから。

すると、携帯がなった。

メールが来ていた。内容を見るとどうやらナギちゃんからだった。

『ココちゃん！本当に2人きつりにしてくれてありがとう。。。』

今、すごい幸せだよ。また、愛しい人と愛し合える。私にとっての最高の

宝物。ココちゃんも大切なひとのこと自分から離しちゃだめだよ。
ナギ』

「・・・ナギ・・・ちゃん。」

心は、急にシヨウが愛おしくなった。起きあがって、シヨウの部屋に入った。

「シヨウ?」

シヨウをみると、あどけなく寝ている。

ふと、シヨウの手をみると心の写真を持っている。

「・・・シヨウ。」

涙が止まんない。

「シヨウ！！起きて！！」

心は、大声を出した。

「・・・んん？」

シヨウは、電気スタンドの電気をつけ、めがねをかける。

「どうした？ごめん、気づかなくて。」

「・・・シヨウ、好き。大好き。すごい悲しくて、さみしくて。」

「ココ・・・。」

シヨウは、心を抱きしめた。

「一緒に寝る？」

「うん。」

心は、うなづいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2348b/>

翼のおれた天使

2010年10月15日09時12分発行